
超越次元の旅人【旧題・異世界を旅する者】

派遣社員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超越次元の旅人【旧題・異世界を旅する者】

【Nコード】

N6725P

【作者名】

派遣社員

【あらすじ】

それは行き成りだった。訳も分からず殺されて、世界も破壊された。そんな現実に落ち込む暇も無く、超美人な女神様によって力を持たされて並行世界に旅に出された俺は、一体どうなってしまおうのだろうか？

12／24追記 この物語は俗に言う最低系且つ自己満足の為の物語と言えるのでくれぐれも御注意してお読み下さい。注意を無視して読んでしまつて、SAN値がゼロになつても責任を負いかねます。
(笑)

1／4 追記 家の諸事・書きたい事の見直し等の理由で、一時更新を停止させて頂きます。再びやる気はありますので、時間が出来ましたら更新させて頂きますので大変勝手では御座いますが宜しくお願い致します。

5／1 追記 再び更新させて頂いていただきます。宜しく願いいたします。

プロローグ 改訂版（前書き）

この作者は大変な厨二病です。さらに主人公最強主義且つハーレム属性も入るかもしれません。これらの設定が嫌いな方、おぞましさを感じる方はS A N値がゼロになる前にブラウザバックして下さい。

プロローグ 改訂版

白、どこまでも広がる白い空間。見渡す限り白しかないそこで、俺は呆然としていた。

厳密に言えばつい先程から今現在の、有り得ず、理不尽この上ない現象に対して現実逃避している、
と言えるだろう。何が起こったのか簡単に説明すれば、

俺は殺された。

たったの一言で済む、唯一つの現実。でも上に「ゲームの中の登場人物に」と言う言葉が入ればありえない現象と化す。

テイルズ系ある意味最強の『ミスター理不尽』
バルバトス・ゲーティア

背格好だけなら幾らでもコスプレすれば有り得るだろう。でも普通の人間ならば、今まで何も無かった場所に急に現れたりはしないし、ただの斧の一撃で直径3メートルのクレーターを作ったりはしない。つまりは…本物。

とにかくこいつは俺を見た瞬間、にやりと笑みを浮かべ、いきなり攻撃を仕掛けてきたのである。現れた瞬間に感じた生来の危機回避能力をフル活用して、後ろに跳び退らなければ最初の一撃で起きたクレーターの底で単なる肉塊へと成り果てていただろう。

「ほう、今のを避けたか。……只の人間にしては面白い。だがっ」

さらに飛んでくる斧による斬撃。唐竹割りを転がりながら避け、学校帰りに寄った金物屋で購入したフライパンで左薙ぎを奇跡的に

往なし、自販機を盾にして切り上げを避け、盾になる物は無いかと探しながら……其れに、気が付いた。

「何で……誰もいない？」

そう、誰もいないのだ。人通りがかなり多い筈の通りをバルバトスから逃げているのに、不自然過ぎるほどに何もいない。信号機も色を発しておらず、今更気が付いたが他も全てモノクロ。色があるのは俺と…。

「ふん。今更気が付いたか…」

バルバトス
理不尽のみ。奴は更に続けて、

「人間。貴様に生き延びる術は無い。気が付いたならば…死ね」

瞬間、奴の姿が消え——、俺の腹部から夥しい量の血と、引っ掻き回した後のような内臓と奴の斧が飛び出し、俺は意識を失った。

——そして今の現状に至る、と。

等と考え事をしていると、後ろから話しかけられた。

「もし、その者」

振り向くと同時に思わず身構えてしまった俺は決して悪くないはずだ。だって回想する前には絶対いなかった筈だもの。

「そなたに話が有って出て来たのだが、驚かせてしまったようだな、すまない。…そう警戒するでない。わらわにそなたを害する意思は

無い。話が有って来たのだ」

その人？は、正直美人さんだった。腰ほどまで伸びた艶やかな黒髪に、切れ長の眼。高過ぎない鼻に深紅のルージュを付けている様な艶やかで小さめの唇。出るところは出て、引つ込む所は引つ込んでいる、世の女性が見たら間違い無く嫉妬しそうな女性だった。俺は警戒しながらも相手に返答した。

「あんたに俺を害する意思がないたって、そう簡単に信じられる訳が無いだろう」

女性は一つ頷き、

「ふむ。確かに、その通りだな。まずは自己紹介と行こうか？」

と、強引に話を先に進め始めた。

「わらわは、そなた達の世界では『神』と呼ばれる存在。その中でも【魂の創製と転生】を司る『神』。原初なる『神』が定めし名をアステスと言う。人間に『神』が名を名乗るのは初めての事だな。ふふふ、特別栄誉な事だぞ。光栄に思うが良い」

俺は、名を聞いた瞬間から感じ取られる強大無比の気配に圧倒されながら何とか口を開いた。

「は、はあ。俺は、相川・A・明一（あいかわ・A・あきら）といします。宜しく願います」

丁寧語なのは当然だと思って頂きたい。この圧力前に通常口調とか死んでも無理。（もう死んでるけど）

「うむ、では明とやら。そなた、再び生を得たいとは思わんか？」

アステス様が行き成り変な事を聞いてきた。当然生きたいに決まっている。俺が頷くと、話を続ける。

「では、生き返らせてやろう。が、一つ条件がある。良いかな？」

俺は何だろうと思い、

「その条件とは？」

と、聞いてみた。

「そなたが死んだ後、そなたの世界が奴の存在力に負けて無数のパズルのピースのようになり、色々な並行世界へと吹き飛んでしまっておった。それを一人で回収して再び世界の形を取り戻して欲しいのだ」

俺は即答して答えた。

「無理です。一人とかこれなんて罰ゲームですか？」

明らかに不可能である。俺に出来る事を遙かを一億個付けてもいい位超越している。人間である以上不可能である。無限に広がる並行世界を旅して回って、再び死ぬまでに無数に散った欠片を集めるなんて真似は時間・技術・技能的に見ても無理である。仮にやらないといけないにしても、せめて人手と危険な世界に行った時の為に『力』が無いとやっていられない。と、考えていると

「ならば、人手はやれんがお前がそれを行うとして、何が必要か言ってみろ。わらわが叶えてやろう」

俺は、アステス様から言われた願いについて考えてみた。確かにある程度までの願いが叶うのならば、それは言ってみるだけの価値がある。次に願いに付いて考えてみることにした。先ず、必要なものは時間と技術と技能、そして何より、『力』である。よって、一つ目を聞いてみた。

「では、先ず一つ目ですが、事が済むまでの間、不老不死にして頂けませんか？更に不老不死を他者に分割させて頂きたいのです」

それに対してのアステス様の答えはといえば。

「それが、永久にいうのであれば可能だが、何時までという期限付きは無理だ。それが叶うと存在に矛盾が発生するからな…」

成る程……。おそらく存在に書き込まれた『不死』と『死ない』が矛盾となるのだろうと思った。が、そうすると逆もまた然りだろうと気付く。アステス様が理由を話し始めたので聞くことにする。

「理由は簡単だ。わらわが弄れるのは各事項に対して一度のみだからな」

そうすると不老は兎も角、不死は悩む所だな。でも俺は中途半端は嫌だから、一度始めるのなら最後まで続けないと気が済まない。

「分かりました。では不老不死とその分割能力を一つ目の願いにお願いします」

アステス様が頷き、指先から発せられた光が俺を包み込み、中に消えていった。

「これでそなたの魂の情報に刻み込んだ。そなたの不老不死は何があらうと消える事はないし、自在に他者への分割も出来よう。但し、良く考えて使えよ？それ（不老不死分割能力）はうかつに使えば他人を間違い無く不幸にする」

俺はその言葉を深く胸に刻み込む。その後、次の願いを考え始める。幾ら不老不死になった所で、再生が不可能になったら困り、何より、ずっと攻撃を受け続けて肉体が消滅したら意味がない。よって次の願いは…。

「それでは次の願いです。俺のヘイフリックの限界を消して、無限瞬間復元能力を下さい。それと、身体異常即時健全化能力を下さい」

アステス様は眼を開いて驚いた。

「ほう。今まで何人かの転生者の面倒も見てきたが、そこまで考えた奴はいなかったな。誰も彼も『不老不死＝無限に復活できる』と勘違いしていた。…良からう。ついでにそれにも分割能力をくれてやる」

再び光が俺を覆い、そして中に消えていった。やはり思ったとおりだった。不老不死というのは結局精神的な物なのだろうと思って言って良かった。

「他に願いは無いのか？」

と、アステス様が聞いてきたので、次の願いを言う事にする。前

に、確認する。

「一応聞きたいのですが、並行世界の中には俺の世界でアニメ・ゲームになった世界は有るのですか？」

アステス様は一つ頷き、説明を始めた。

「勿論、ある。そもそもそのアニメや漫画、ゲームというのは、作った者達がそれらの因果情報の断片を受け取ったのを思いついたと勘違いされたものが大半だ」

俺は成る程と一つ頷き、願いを言う事にした。

「では、それらの世界の内、『テイルズ系』『ファイナルファンタジー系』『ネギま！系』『スパロボ系』『ガンダム系』『ドラゴンボール系』の技、術、魔法、技術、技能をノーリスクで使用出来る能力を頂きたいと思います」

それを聞き、難しい顔をしていたアステス様は指を一本だして言った。

「ふむ……。『ドラゴンボール系』はその世界でのみ使用可能とするが良いか？その世界は他の世界に干渉する事を禁じられているのでな。代わりに『ゲットバッカーズ系』の能力をくれてやろう」

成る程。あまりにも隔絶した能力はその世界限定となるのか……。但し、技術はその隔絶が無いらしい。

「そうですか。でしたらGBの力は要りませんので代わりにドラゴンクエストⅠロトの紋章Ⅰの世界の『合体呪法』。これを全世界魔

法対応ください。して、次の願いですが先程に行った世界に関連するのですが、それらの世界に存在する道具、武器、防具、アクセサリー、宝具ほぼ全てを無限に取り出せる次元宝庫を使用出来る能力を頂きたいのですが、宜しいでしょうか？」

アステス様は今度は容易く頷き、能力をくれた。俺はここで不安になり、聞いてみる。

「あの、これだけの能力を頂いても宜しいのですか？」

アステス様はクスリと笑い、言った。

「この程度の能力でよければまだ20、30言われても問題等無い。私を上回れるだけのチカラ等と言われてはいないからな。今のお前ならばウォームアップ中に無力化出来るわ」

……………これでもまだ全く手が出ないんだ。どれだけ強いんだよ。

「ほれ、まだあるのなら言え。ほらほら、わらわも暇という訳じゃないのだ」

俺は自重をやめることにした。…今でも80%位は自重していなかったんだが……。

「では、

- ・魔力、氣、神力等の無限化及び自在行使能力
- ・全並行世界、全時代、全国家の通貨の無限所持
- ・全技術の小型高性能化
- ・脳内容量の無限化及び、知識や情報の自在行使能力

の、4つの能力を頂きたいと思います。宜しいでしょうか？」

アステス様は再びあっさり頷き俺に光を放った。光が吸い込まれていき、叶ったようだ。

「以上で良いのか？ならばそなたに任務を与えよう。これ位は他に引き受けてくれよ？」

薄々理解していたがやはり、追加で何かやらされる様である。俺は頷き、黙って話を聞く。

「とは言っても今はまだ無い。必要になったら言うから憶えておいてくれれば良い」

俺は思いつきりつんのめった。アステス様がそれを見て笑いながら続けた。

「そして、肝心のピースだが、これを使って探し出すが良い」

そういつて俺になにやらP〇Pの様な物を渡してきた。

「これは？」

俺が聞くとアステス様は答える。

「これはな、近い世界のピースの場所が分かるアイテムだ。ピースはそれぞれの世界に物として有る事も有れば、人物に宿っている事も有る。よって、そのレーダーモードで調べろ。ついでに言えばそれは意思に応じて、様々な物にも変化したりする。デバイスや刀などの武器、無限弾倉式の銃火器、果ては私が考案したロボットとかな。必要に応じて使え」

わざわざそんなシステムまで付いているとは、有り難い限りである。

「此処までの重ね重ねの御厚意誠に有難う御座います。では、私は行く事に致します。さらばです」

アステス様はゆっくりと頷き微笑んで手を振ってくれた。そして――、急に真下に開いた穴に落ちていったのであった。

こんちくしょう。最後まで締めさせろよ……。

O T Z

プロローグ 改訂版（後書き）

感想、指摘、誤字脱字、有りましたら宜しくお願い致します。

主人公設定（前書き）

追加があれば随時直していきます。

主人公設定

氏名

相川・A・明
アルバート

年齢

永遠の21歳

容姿

身長は183cm。ハーフの為、髪の色はプラチナブロンド。肌は褐色に近い、と言う程度。瞳の色は明るい茶。顔つきは本人曰く「例えるなら、恋姫の本郷一刀とマブラヴオルタの白銀武とバイオ4のレオン・F・ケネディを50…30…20でブレンドした感じ」結構ハンサムと言える。体格は白銀よりは細いが、かなりしなやかな筋肉を持つ体になっている。所謂「理想的なアスリート」体型。

能力・身体特性

●不老不死。元の体を上限とした無限瞬間復元能力が有る為、滅多に傷も負わない。負っても直に完治する。なお、痛覚も自在に操れる。本人は知らないが、気が狂っても強制的に元の精神に戻る。ある意味、地獄。

●不老不死、及び無限瞬間復元能力の他者への分割。読んでそのままの能力。上記をそのまま他者へ移す。本人は余程の事が無い限り、

使わないでいようと思っているが、明がそんな能力を持つと知った一緒に居たいと想っているヒロイン達が本当にそれを求めないかどうか……。

●魔力を始めとする6つの力全てが無限に生み出される為、燃料切れは事実上存在しない。

●魔力…主にリリカルやネギま!、FFやテイルズの魔法を使うのに必要。発した時の色は藍色。尚、明は全ての精霊と親和性がある上に、親和性が高過ぎるため、詠唱が有っても無くても同じ威力で使える反則存在。

●氣……主にテイルズ系の技及びネギま!とドラゴンボールの技を使用するのに必要。発した時の色は白。

●神力…単体では、身体強化率が一番高いだけ。他に、他者を生き返らせる時に使用する。これの真価は他に混ぜ合わせた時に発揮される。混ぜた『力』の出力を高めたり、融和性を上げたり、永続的、一時的問わず、他人にも付与する事が出来るようになる。明にとっては、他人に『力』を付与する為の物。発した時の色は翠色。

例1…魔力適性の無いアリサ・バニングスに神力を籠めた魔力を分け与えると魔力が使えるようになる。

例2…高町なのはの魔力に神力を込めると持っているAAAランクの魔力がSSランク程にまで上昇する。

例3…桜咲刹那の氣に神力を込め、神力を込めた魔力を与えると、容易く感掛法が使える様になる。

●スパロボ、ガンダム系の＊1機体鎧や＊2機械兵の召喚を使うのに魔力や氣は使わない。

＊1…機体鎧とは、機体とその装備を自分や対象の体格に合わせて召喚し、その武装を持って戦う機動兵器型装甲。勿論、デバイスと一緒に非殺傷設定、物理破壊設定の切り替えが可能。

＊2…上記と違い、10分の1に調整したそれらの兵器の縮小版。機体のコントロールはそれぞれの機体のパイロット：の超高性能AIが行っている。当然の事ながら、デバイスと一緒に非殺傷設定、物理破壊設定の切り替えが可能。某勇者王の組織もビックリである。

●上記の世界の武器・防具・アクセサリ・道具の無限所持可能な次元倉庫の所持。

…そのままである。尚、アステスの厚意により、生活必需品や家具、服なんかも何故か両性別・全サイズで用意されている。

●全並行世界、全時代、全国家の通貨の無限所持

…そのままである。

●上記全技術の小型高性能化

…掌サイズの太陽炉で、性能は2倍以上が出せる位の事が、どんな物にでも応用出来るLV。

●脳内容量の無限化及び、知識・情報の自在行使能力

…簡単に言えば、長寿時のボケ予防…：…もとい忘却防止のための能力。必要な時に必要な記憶・情報が出て来るようにする為のモノ。ドクターカ〇スの二の舞は御免である。

第1話 落ちた世界は…何処？ 改訂版（前書き）

誤字脱字、感想、指摘など有りましたら宜しく願います。

第1話 落ちた世界は…何処？ 改訂版

落ちてる途中で気を失った俺が目を覚ました時目の前にあったのは土だった。

……訂正しよう。どうやら地面の中だった。息が出来ないともがくが、3分もがいて気が付いた。

（息しなくても別に苦しくないし。……さて。どうやって出よう）

改めて体を動かすと、両足は外にあるようだ。……それなんて犬○家？

取り敢えず、『氣』を放出して抜け出そうと足掻き、仕方が分からない事に絶望した。o t z

取り敢えず絶望してても何も変わらないので、体内にある『氣』を探る為に意識を集中する。そこで意識内に思い浮かんだのは、3つの色違いの蛇口と、体内を余す所無く流れる細いホースだった。恐らくはそれが俺のそれぞれの『力』のスイッチ及びツマミなのだろう。こんな細々とした所まで丁寧に設計してくれるなんてありがたい限りである。これなら直ぐに加減の感覚を掴める。

因みにそれぞれ、

『氣』の色は白。

『魔力』の色は藍。

『神力』の色は翠。

となっている。

俺はその内白の蛇口を少しだけ解放した。俺の周囲を白く輝く『氣』が覆い、その勢いで周囲の土を少し吹き飛ばして俺はようやく

地面を脱出したのだった。俺はその場の地面を直し、『氣』の蛇口を閉じた。どうやら最低でも生命活動に必要な分の各『力』は蛇口を閉じていても自動的に供給されている様である。

その後、俺は次元倉庫からFF5のアイテムであるコテージを出し、周囲の探索を始めた。

暫く歩くと、森から外に出た。そこに広がっていたのは広大な自然だった。どうやら外国らしい。

取り敢えず探査機のスイッチを入れ、ピースの在り処を探る。

「イクツカノピース発見セリ。対象現場……日本……海鳴市……翠屋」

……何……だと……。

よりによって、最初からある意味難易度が高すぎる。

夜を待って不法侵入……却下。

幾ら今の俺でも、『力』を全然使いこなせていない今の状態で御神流剣士3人を相手にする。時期によっては更に、白い魔王まで相手をする事に。下手をすれば管理局に次元犯罪者として指名手配。

……自爆行為だ。

正面から直接行って、それを下さいと言ってみる。……却下。

それが商品なら構わないだろうが旅行等で手に入れた品物の場合手放す気は起きないだろう。

次、正面から全ての事情をぶちまけてお願いしてみる。……却下。

幾らなんでも荒唐無稽過ぎる。信じてもらえない可能性が高い上に、精神病院行きか、信じて貰えたとしても、時空管理局に行く事になり、下手に技能を知られば歩くロストロギア扱いで人体ごと封印されたり、そのまま実験用モルモットになりかねない。

俺は別に管理局アンチだとかそういうつもりは無いが、そういう面があるのも事実だと思っている。そうでなければ、元の世界でもアンチとか言われないだろうし。大きい組織にはそれに準ずるだけ

の『闇』がある。最低でも俺はそう思っている。

閑話休題。

まあ、他にも幾つか思いついた訳だが、考えていてもしょうがないという実も蓋も無い結論に到り、取り敢えず近くまで行こうとコテージを片付けて、『機体鎧・ウイングゼロカスタム』を召喚、着装してから強化パーツ『ハイパージャマー』を機体鎧に付けて、日本まで魔力隠蔽しながら飛んで行った。

そして今現在、午前10時30分。俺は海鳴市内の公園内に個人の隠蔽結界を敷いて、『ゼロカスタム』を取っ払っていた。取っ払い終わった後、この後どうするかを考え始めた。

財布の中には20万程入っている。何故翠屋に行かないのかと言えば、ピースは今ジュエルシードの一つ一つに宿っており、此処に来ただけで21個のピースがある事が判明したからである。つまりあの時点で翠屋にあった反応は高町なのはの保持しているジュエルシードの事なのである。つまり、最低でもPT事件には関わらないといけないという事。ついでに言えばユーノ・スクライアや次元航行艦アースラに頼んだ所で事情説明もなしに干渉させてはくれないだろうから、事件中は必然的に第三勢力扱いという事になる。事情説明して理解を示してくれば、良いんだが……。並行世界に移動でもしないと信じてはくれないだろうし……。信じてくればくれたで全並行世界を管理するとか抜かし始められても今度はそれはそれで厄介だし、な。……いや、それは無いか。基本的に並行世界に渡れるようにはなれないだろうし。協力を求められても断固断れば良い。

しかし、タイミングが悪いのか良いのか分からない。いや、良い

んだろうな。PT事件は気に入らない結果だから、それを変えちゃえばいいし。で、出来れば事件後にでも、姿を晦ませてこの世界から去る、と。……一家も違う並行世界に案内しようかな。……プレシアさんはこの世界では次元犯罪者みたいだし。まあ、それは今考えなくても良いか。

さて、この後の行動だが。まずは駄目元で高町なのは及びユーノ・スクライアに話をしてみるか。この二人の対応――（主にユーノの反応）で魔導師がどう思うかを推測させて貰おう……。俺は二人を探す為に動き出した。が、10分後に発見する。……どうやら友達と一緒にサッカーの試合を見ているようだ。

という事は今日は大樹事件――（俺命名）の日か。ならば予定を変更して、まずはサッカー少年が持っている物を頂く事にしよう。そう考えた俺はもう一度自分にバニシュを掛けてから暫く少年の近辺に居て、翠屋から出て少年が女の子と二人きりになった所で、少年と少女の周辺を座標に纏める。そして詠唱を開始した。

「『合体魔法』起動。其は人を含めた周囲の時を停めるモノなり、術式『ストップ＋ストップ』時停止結界魔法・ストップ2』……！」

そして止まっている二人のうち、少年を調べてジュエルシードを取り出す。次に、代わりに同様の形のクリスタルの塊を同じ様にし、て入れた後、貰ったジュエルシードを異空間にしまいこんで、その場から離れて魔法を解除する。その後、山中まで『瞬動』で移動して隠蔽結界を作り、その中でジュエルシードからピースを取り出し、探査機の中に入れる。すると探査機が光を放ってアステス様の声が響いた。

『ほう……。早速一つ目を手に入れたか。ならば……。いや、気にするな。少々早計過ぎるか』

その言葉に何かを感じたがそのまま流す。

「はい。タイミング的に高町達とは敵対しないとならない可能性がありますが、ね」

俺の言葉にアステス様は、

『ふむ。しかし、プレシア・テストロッサ側とは歩み寄れるのではないか?』

と、切り返す。それに対して俺は、

「それには、死者の蘇生が必要です。これが最低条件ですが、流石に『死者蘇生』は無理でしょう?」

『死者蘇生』は何処の世界でも禁則事項なのは分かりきっている。ドラゴンボールの世界でさえ、最初は一回のみしか蘇生できなかったのだから。

『ふむ、そうだな。……普通ならば、な』

「どういことですか?」

アステス様は悪戯に成功した子供ののような笑みを浮かべ、続けた。

『うむ。言うのを忘れていたのだがな、実はそなたのみの特例として既に冥界の最高神より、蘇生の許可を貰っているのだ。と言って一つの並行世界に付き、30名までだがな…』

俺は思わず素で突っ込んだ。

「おいおい。神が易々とそんな事許可してんじゃねえよ」

アステス様は嬉しそうに言う。

『そうだ。それだ。お前はわらわが気に入ったただ唯一の人間なのだ。今までの堅苦しい言葉遣いなんぞ要らん。今後はそれで良い。ついでに心の中だろうがその様付けを止めよ。全く気に入らん』

俺は心底呆れながら頷き、

「わかった。じゃあこれからは丁寧語も様付けも止めるから。これからはよろしくな、アステス」

アステスは頷いた後、

『では次の話だがな。お前に渡した探査機に搭載されているデバイスに、ミッドチルダ式と古代ベルカ式の術式を叩き込んでおいたので、怪しまれなければ基本はそれを使い』

……成る程。確かにその通りなので頷いた。

『以上だ。では、又ピースを集めた時に逢おう』

そう言うのと探査機から姿を消した。それを見ながら俺は次の作戦を考える為、結界の中にコテージを出して、中に入っていくのであった。

第1話 落ちた世界は…何処？ 改訂版（後書き）

此処では、今回使われた魔法などについても説明して行きたいと思っています。

・ストップ2：ドラクエの外伝、ロトの紋章から合体魔法の技術を使い、FF魔法を使った物。時空魔法ストップは、御存知の通り、敵単体の時を止めてしまう魔法。今回のこの魔法は×2する事で対象の範囲を決め、その中の存在の時を止める。但し、その中に術者は巻き込めない。

今回でアステスが少しデレた模様。最終的に落ちるかどうかはいまだ未定です。（爆）

さてさて次回は、ようやくと原作キャラとの会話がある予定です。ではでは、次回もお楽しみに…：：：してくれればいいなあ（汗）

第2話 交渉と悲願と約束 改訂版(前書き)

さてさて、今回はなのはとの交渉の予定。もう既に原作破壊もいいところですが、出来る限り齟齬を無くしていけたら良いのですが。……頑張ります。

第2話 交渉と悲願と約束 改訂版

翌朝、俺が目覚めた後、軽くシャワーを浴びたり、着替えたり、朝食を作ったりして準備を終えた後、外に出てコテージをしまった。（因みに、本日の俺の衣装は白いYシャツにジーンズで、献立はベークンエッグに温野菜。それに近くのコンビニで購入したおにぎりである。しゃけおにぎり、美味しい♪）

閑話休題

今日は高町なのは嬢との交渉の日である。……と言っても、俺が一方的に決めただけだが。

取り敢えず月曜日なので高町なのは嬢の学校が終わらなければ話にならない。それまで他のジュエルシードを探して時間をつぶす事にする。俺は探査機を取り出し、レーダーを市内範囲で広げた。と、空中を移動している様にしか見えない反応を一つ見つけた。どうやらカラスがくわえているらしい。取り敢えず、その辺りを魔力を隠蔽出来る位相結界で覆い、探査機をデバイスに変え、驚かせる為に藍色のスフィアを一つ放つ。勿論、当てるつもりは無い。そんな動物愛護団体から苦情を送られそうな事はしない。因みに俺の魔力光はやはり藍色のようだ。意識内の『蛇口』を見た時になんとなく予測していたが、少々暗い色なのが気になるが、男でどピンクとかよりは良い。

カラスが驚いてジュエルシードを放したのでそれを追って『ブリツァクション』を使って先回りして受け止め、一応封印魔法を使ってデバイスに入れるとデバイスモードからレーダーモードに戻した。

その後も暫く回り、合計4個のジュエルシードをえて、現在時間

は午後4時。次のジュエルシードの確認を最後にして高町なのは嬢の所に行く事にして、リーダーをみると、反応があったので行ってみる。そこにいたのは今にもジュエルシードを飲み込もうとしていた大きな蛇の姿だった。厳密に言えばネズミがいてその直ぐ影にジュエルシードがあった。普通の蛇なら良いが、今回のように突然変異アオダイショウ（約2m）では大問題である。俺は咄嗟に簡易封時結界を作る。この結界では反応されてしまうかもしれないが仕方が無い。

全長20m以上の巨大蛇に山の中とはいえ周囲で暴れられては被害がとんでもなくなる上、誰かに見られるような事があっては流石に不味い。と言うか、何でそんな大蛇がいるのか激しく疑問だ。

とにかく、俺はデバイスモードを起動すると誘導弾（以後スナイプスファイア）を5、6個放ち、相手の様子を見る。複雑な機動を描くスナイプスファイアが良い様に当たり、奴がうろたえている。俺は更に5発のスナイプスファイアを囷として撃ちこみ複雑な機動を描かせて、自分は熱反応を隠蔽して封印魔法の準備をする。蛇は基本的に熱反応を見て餌を判別する。こうして熱反応を隠蔽すれば蛇は此方に気が付かず、良い様に踊ってくれる。そして十二分に対象を踊らせて疲れさせた所で封印魔法を放った。

俺の封印魔法は、形を言うなれば蜘蛛の巣である。無数の藍色の糸が伸びて対象を繭上に覆い、その中で対象と、取り込まれた者がいればその者とを分割し開放、対象は同時に封印する。痛みも一切無く、理想的な封印魔法と言える。

閑話休題

何故疲れさせたのかと言えば、流石に2mの大物となると封印してからでも直ぐに動き出しかねないからだ。俺は転送魔法を応用して、蛇をネギま！に登場する『ダイオラマ球』の中に（中身は雄大

な自然環境）転送した。因みにこの『ダイオラマ球』を作ったのは女神アステスである。当然、色々と特別製である。それはともかく、その後である。簡易封時結界を解くと短めなツインテールの、白い服を纏った少女がやってきた。フェレットも肩に乗っている。どうやら高町なのは嬢とユーノ・スクライアのようなようだ。丁度良いと思いつつ俺は話しかけた。

「この世界の魔導師か？お初にお目に掛かる。俺は相川・A・明。ジュエルシードが取り込んだ欠片を探している。其方がジュエルシードを持っているようなら一時的でも良いから貸して貰いたい。」

どうやら俺の事を警戒しているらしいユーノ・スクライアは、

「それは駄目です。むしろジュエルシードを持っているようなら、渡してください！！それはとても危険な物なんだ！！」

と、全く取り合う気配が無い。……まあ、気持ちには分かる。どう考えたって、不審者にしか見えない奴相手に警戒を解く必要なんぞ無い。

「そこを何とか曲げて頼めないか？随分虫の良い話だとは分かっているが、俺も自分の出身世界の為に必要な事なんだ。ジュエルシードの中に取り込まれている自分の世界のピースを取り出したいだけなんだが」

ユーノ・スクライアは俺の言う事を信じようとしないうで、

「そんな事信じられない」

の繰り返しである。俺は仕方なく、最初のジュエルシードを渡す。

もう既に抽出が終わっている以上必要が無いからだ。ユーノはそれをなのは嬢のデバイスに入れる。するとなのは嬢が話しかけてきた。

「あの、私は高町なのはって言います。この子はユーノ君」

「……自己紹介が遅れました。ユーノ・スクライアです」

どうやらやっと自己紹介が聞けたようだ。

「ふむ。フルネームじゃんだから高町嬢とスクライアで良いかな？」

と俺が聞くと、

「なのはで良いですよ」

と言ってくれたのでそう呼ぶ事にする。

「所で、なのは嬢、スクライア。さっきの話なんだが。……大変申し訳ないのだが、俺も自分の世界の復活に関わって来る以上、譲る事は出来ないんだ。と言う訳でどうしても譲れない為に、戦って打ち破るしかない。……お互いに、な」

俺はなのはの眼を見つめながら続ける。

「なに、非殺傷設定がある以上、墜落しない限り怪我はしない。怪我をしたとしても俺なら即死以外治せる。幾分過激な喧嘩だと思って正々堂々やりあおうじゃないか？」

と言ったりしてみる。なのは嬢に実戦経験が無いのは良く知って

いるので、ここらで実戦経験をくれてやろうなんて思惑もある。それに成長イベントを一つ消してしまったのも事実。その分これで何か考えが変われば、なんて思いも。万が一なのは嬢が此処で潰れてしまう様な事が有れば、責任を取ってなのは嬢がすべき事に近い事もやってあげようとも思っている。

……念の為言っておくが、わざとトラウマをつけて、責任を取って嫁に。なんてドカスな考えは無い。……当人が望めば話は別だが。なのは可愛いし。

コホン、有り得ねえ話は止めておこう。こっちが悲しくなる。

まあ、レイジングハートを持つ高町なのは嬢が折れるなんてのは想像してもいないが。俺はデバイスモードの探査機を構える。ちなみに俺のデバイスは先が二股になった黒いロッドである。分かる人にはダイの大冒険に登場する勇者の親友の大魔道士の武器を想像してくれば良い。なのは嬢は面白いように動揺する。ユーノは俺に言った。

「なのははまだ戦闘経験が無いんだ！無茶苦茶な事を言わないでくれ！」

俺はそれに対し、

「ならどうして危険な事を自らしている？それに、何故戦いという物を教えなかった？魔導師である以上何時かはこうなる事は君には想像出来た筈だ」

俺はそれが信じられない。ユーノは決して頭が悪いわけではない。……結局管理外世界だからと甘く見ているのだ。魔導師の襲撃は有り得ないと。ユーノは何も言えないのか、俯いて蒼ざめている。

「……安心しろ。この場に限って言えば、怪我をさせるつもりも、ましてや殺すつもりもない。無論、事故の可能性を除いてそのデバイス破壊する心算も無い。仮にもし怪我をさせておきながら治せない事になった時にはこの身を高町なのは嬢の矛と盾の代わりしよう。スクライア、君自身にも分かりやすいようにいえば、使い魔の代わりとして君達二人の為に働こう。更におまけして、此処でなのはが負けても、君のジュエルシードの他に俺が持っているジュエルシードも、君たちの目の前で作業して、その後、君達に無償で渡す事をこのデバイスに誓おう。どうか、この絶好の機会になのは嬢を鍛える心算でやってはどうか？」

俺は、ネギま！のフェイトが持っていた封印級の契約用魔導具・エンノモス・アエトスフラーギス鵬法璽を見せて続ける。

「この魔導具はね。契約という形で言った内容を魂まで縛り付ける物だ。勿論対象は俺に限定する。誰だってそんな物受けたくは無いだろうしね。これを使っても構わない。何なら負けてもその条件に合致するよう設定しようか？」

なのは嬢が慌てて首を振りながら言った。

「そんな物はありません。ですから話し合いでどうにかありませんか？」

「だが、その話し合いが話し合いの体を成さないからこう言うのだ。俺としても君みたいに才能に溢れた少女を傷付ける趣味は無い。だがジュエルシードに、信じては貰えないかも知れないが俺にとって家族の欠片かもしれない世界のピースが含まれている可能性が少しでも有るのなら、見逃す事は出来ない」

俺がそう言うとなのはは、

「でしたら、ユーノ君と話し合いをさせてください。貴方の言うことが本当なら私は協力したいです」

……やっぱりなのは優しい子だ。なのはの言葉を聞いてユーノも悩んでいる。多分、彼も俺の言うことが本当なら協力したいと思ってくれているのだろう。

「なのは……、分かったよ。後で彼の言うことを検証してみる」

と言った。やっぱり、二人とも優しい子だ。

「では今日は此処までだな。……そうだな、3日後にまた会おう。場所は君の家の喫茶店でいいか。問題はないね？」

そう二人に言うのと、頷いてくれたので、二人に約束の証として、今日俺が封印した5個のジュエルシードの内3個を渡した。その後、二人が見ている前で二つのジュエルシードを取り出し、ジュエルシードからピースを2つ取り出して二人に渡した。

……原作通りの性格の彼女なら、一度交わした約束を違える様な真似はすまいと確信して。

億が一そんな事になったとしても、多少文句は言うが、その後には戦って打ち破るだけだが。

その後俺は、再びジュエルシード集めに奔走し始めた。その後夜9時までには2個のジュエルシードを見つけて封印とピース回収終え

た後今日の探索を終えて、コンビニで弁当を買って丘の上にコテージを建てて、今日の所はそこで休んだのであった。

第2話 交渉と悲願と約束 改訂版（後書き）

作者「さてさて、今回なのはちゃんと交渉の約束をした明君。次は一体何を仕出かすのか。て、言うか、明君は今回少々先走りすぎだね」

明「……反省している。昔からの悪い癖だな、先走りし過ぎて暴走するのは……」

作者「まあ、人間だもの。完全な所なんて無いんじゃない？」

明「そう言いたい所だが、俺には悪い所が多すぎるからな。何時か致命的な何かを仕出かしそうで怖い」

作者「大丈夫だ。何か危険な兆候があればアステスがどうにかするように出てくるし……」

明「まあ、兎に角。これから頑張りますので宜しくお願いします」

さて、今回の魔法紹介です。

フライアー・フィン……

リリカルを知っている方なら御存知、なのはちゃんが使っている飛行魔法。今回から飛行魔法はリリカルな感じになる可能性が高いです。なんだかんだいって結局、使い勝手が良いので。

スナイプ・スファイア……

これまたリリカルな魔法。要するに誘導弾です。明君なら何発撃つてもマルチタスクでいけます。なんせ、脳内情報量と共に出力も無

限なので。（この場合の出力はマルチタスクの数も入りますので）

魔力隠蔽結界……

魔力自体の感知が出来なくなる結界。勿論、結界自体の魔力も感知出来ません。

簡易封時結界……

原作通り、位相空間を作る結界です。

封印魔法……

形を言うなれば蜘蛛の巣です。無数の藍色の糸が伸びて対象を繭上に覆い、その中で対象と、取り込まれた者がいればその者とを分割し開放、対象は同時に封印します。痛みも一切無く、理想的な封印魔法だと思います。

魔法アイテム

『ダイオラマ球』……ネギま！読者なら御存知、有る意味チートアイテムです。精神と時の部屋の劣化版ですが、好きなだけ入っていられます。

鵬法璽……これもネギま！読者なら一度は目にした事が有る筈。封印級の契約用魔導具です。契約した者の言葉を絶対遵守させる危険物です。ビジネスに用いれば良いかもしれませんが、使ったら流石に外道かと……。

では、次回をお楽しみに。

第3話 治療と約束と和解と蘇生

改訂版（前書き）

今回はお説教が多分に含まれております。更には多大な自身の認識するアニメ世界論が入っております。御注意下さい。

なお、本日確認したところお気に入りが14まで増加しております。皆様、誠に有難う御座います。これからも頑張ります！！宜しくお願い致します。

第3話 治療と約束と和解と蘇生

改訂版

なのは嬢と交渉の約束をした翌日。俺は次元空間を、機体鎧『ブリッツ』を喚びだし、『ミラージュコロイド』を展開して飛び回っていた。

今日はジュエルシードの探索は中止して、とある一家の悩みを解いてあげようと思っている。そう、テストロッサ家の五人である。呼び戻す魂は二人、又は一人。

時の庭園には魔力炉があると記憶していたので、魔力反応の特に濃い場所をさっきから探している。因みに、速度はマッハ6といった所である。そして4時間という快挙的速度で何とか見つけだして着陸し、『ミラージュコロイド』と『ブリッツ』を解除して歩きだした。

暫く歩いていると、奥から一人の少女と赤い毛の狼が現れた。二人ともかなり戦う気満々のようだ。

まあ、奇襲されなかったただけまだマシかも知れない。俺は、その少女に話しかける。

「勝手に入った事については謝罪させて貰うが、初対面の人間に戦意満々と言うのはどうかな？ フェイト・テストロッサ嬢。それはとにかく俺はプレシア・テストロッサに交渉したい事があってきたのだが、案内して貰えないかな？ 俺の存在は彼女の計画を初手で完遂させると言えば分かって貰えると思うよ？」

少女は警戒を解かずに念話をしていたようだが、暫くすると戦意が消えた。

「……………可笑しな真似はせずに付いて来て下さい」

どうやら信じて頂けたようなので、大人しく付いていく。赤い毛の狼……アルフはまだ警戒心剥き出しの上に少し唸っているが、仕方の無い事であろう。そのまま15分ほど歩くと大きな扉がみえた。そこで歩むのを止め、フェイト嬢が俺に話しかけてきた。

「……このまま進んで下さい。私はやる事が有りますので此処で失礼させていただきます」

そしてその言葉通り、フェイトはアルフを伴って歩き去っていった。どうやらプレシアの命令の様である。俺は扉を開きプレシアの前10mほどまで歩み寄ろうとしたが、15m程の所でスフィアが飛んで来たので止まる。まあ、俺からすれば何処からだろうが問題は無いのだが、態々警戒を更に煽る必要性もない。俺は口を開く。

「初めまして、プレシア・テストロッサ。俺はあんたの願いを叶える為に来た」

彼女は氣だるげに返してくる。

「……私の願いを知っていてそういう事を言うのかしら？」

俺は更に返しながら、彼女の身体を『解析』してみたが酷いものである。これでは例えアリシアが生き返ってもすぐに悲しい別れが待っているだろう。まあ、それをどうにかするのも想定内に入っているが。

「そうでなきゃそんな大言を吐けないと思うが？……26年前のヒ

ユードラ魔導炉暴走事件で失ったあんたのもう一人の娘、アリシア・テストロッサの蘇生。ああ、因みに情報源はアカシックレコードだと思ってくれば間違っちゃいない。その前にした、あんたとアリシアの可愛い約束も記されていたが、あんた覚えているか？」

「……アリシアを生き返らせるのが優先よ」

彼女はどうかやら忘れている事を誤魔化した様である。だからそれを突きつけてやる。

「だったら何でフェイトに酷い事をしているんだ？あんたは望まぬ形とは言え、既にアリシアの願いを叶えているんだぜ？……忘れていたなら思い出させてやる。あんたの娘が願ったのは、妹が欲しいと言う夢だ！」

俺の言葉にプレシアが激昂する。

「ふざけないで！！アレはただのアリシアの失敗作、人形なのよ！！それを「ふざけんなはこの台詞だ！！あの娘はアリシアじゃ無い！！アリシアの魂が宿っていない以上、そして、あんたがアリシアの次に生み出した以上、あの娘はフェイトという、アリシアとは別の人間にして、アリシアの妹だ！！！！自分が作った子供を長女の代わりみたいに扱ってんならまだ良い。無論、一般概念としては駄目だろうか。だが、あんたがやっている事は『次女を、お前は長女じゃないと言う理由で虐待しているだけ』じゃねえか。それでもあんなに想ってくれてんのにあんたはそれすらも台無しにしている。それってどうなんだよ」……」

俺は彼女の言葉を遮り、前々から思ってきた事をぶつけてやる。彼女は言葉も無いようだ。

「さて、つい熱くなってしまったが話を続けよう。俺にはアリシアを生き返らせる術がある。だが、今のあんたがそんなでは生き返らせても幸せは長続きしない。精神的にはどうにかまともになりそうでも、身体面で出来ない。生き返って直ぐにお母さんが死んでしまいましたじゃあまりにも不出来だ。と言う訳であんたには俺特性の治療も受けて貰う。全てはそれからだ。まあ、その間にアリシアの身体が使えなくなっても困るから、俺の持つ術を受けてもらうが、な。合体魔法『ストップ2』。リスクは一切無く、今直ぐでも掛けられる」

「本当に危険は無いのかしら？」

プレシアの疑問は最もである。俺はそれに対し一切無いと答え、アリシア嬢のカプセルまで行ってアリシア嬢をカプセルから出す。一時的に心肺の鼓動をさせてその間に体内の走査を行い異常のあるところを確認して、次元倉庫にあったシートを引いてその上に寝かせ、プレシアにアリシア嬢用の服を用意して貰い、着替えさせて貰った後に、アリシア嬢とプレシアに『リザレクション』を使用してから、アリシアの生命活動を一旦止め、『ストップ2』を掛けた。……今のアリシアに欲情？誰がするのか。する奴がいたら俺はそいつに『スプラッシュ』の後に『インディグネイション』と『メテオスウォーム』を3回ずつ叩き込む用意が有る。安心すると良い。

閑話休題。

その後、再び俺はプレシアに話し掛けた。

「さて、あんたに選択の時間だ。俺がそれらの事を100%の成功率でやってやる。その代わりあんたはフェイト嬢の事をもう一人の

娘だと、正しく接してやりな。ちゃんと全て打ち明けた上でな。あの子はそれが必要だ。もしそれが無理だって言うのなら俺はこれ以上協力しない」

さて、プレシアはどういう結論を出すのやら。

「……………分かったわ。あの娘を、フェイトをアリシアの妹として扱え、というのならその意見に従いましょう。いえ、最初は難しいかもしれないけれどそうなって見せるわ。だから、アリシアの事、頼めるかしら。それと私の事は名前で良いわ」

そういうプレシアの眼には既に曇りがなくなっていた。……これなら約束を破る様な事も無いだろう。

「分かった。じゃあ、先ずはあんただな。その前にフェイト嬢とアルフを呼びな。あんたに魔法を掛ける前にそれを見ていて貰わないと、掛けた後に分からないかもしれないからな」

プレシアさんは頷き、フェイト嬢とアルフを呼んだ。そして来たフェイト嬢を軽く抱きしめ言った。

「今まで辛く当ってしまっでごめんなさいね。その青年に怒られて気が付くような駄目な母親だけど赦してくれるかしら」

フェイト嬢は眼に涙を浮かべながら、うん、うんと何度も頷いて抱き締め返していた。うむうむ、仲直りは良きものよ。と、俺は空気を呼んで部屋の隅の方にアリシア嬢を抱えて引っ込む。

そして、お客さん放っというて実に半日間の間、――（フェイト嬢の事情も合わせて）語り合うポンコツ親子であった。しかし、プレシ

アさん、やはり幾らか無理していたらしい。吹っ切った後の優しい事この上ない顔ったら。アルフと二人してポカンとしてしまった。

多少設定と違う様な気がするがあくまで作品中の設定は、演出という可能性は十二分に有る。だって此処は原作を元に作った世界という訳ではないのだから……。あくまで逆で、原作を『この世界』を見た者が作ったのである。

閑話休題

その後、戻ってきた二人が謝ったのを手で制してアリシア嬢の蘇生の為、三角を二つ上下組み合わせた魔法陣の中に星型の魔法陣を書いたものを床に描き出し、アリシア嬢を魔法陣の上に寝かせ『ストップ2』を解呪して、魂を呼び戻す為に呪文を唱え始めた。

【神界の大神アステスの御名に於いて 冥界に在りし清廉なる御霊を今此処に引き戻せ 汝、名をアリシア・テストロッサ】

翠色の五紡星が発生して、光が立ち上る。次にアリシアの身体が浮き上がり、光の柱の前に立つような形になる。そして、光りの中を小さな光が降りて来て、アリシア嬢の身体にスウツと入っていく。そのあと光が消え、アリシア嬢の身体が元の位置に戻る。

俺はアリシア嬢の腕を取って脈拍を調べ、安心してため息をつく。

「蘇生成功だ。今の彼女は眠っており、あと数時間もすれば目を覚ますだろう。……さて、次は山猫の使い魔だが、魂は此処に在るようだ。余程心配だったんだろうな。今もプレシアさんの後ろにいる。山猫の形はしているが……ふむ。生き返りたいかな？」

プレシアさんの後ろから目の前まで走ってきて、こくこくと頷いたので肉体を作る為の用意をする。

『すまないが、直接人体を作れるような力は無いのでな。暫くは無理だ。しかし準備が出来次第作ってやるから少しだけ待ってくれ』

俺がリニスと思われる山猫の魂に話し掛けると少ししょんぼりしたようだが頷いてくれたのだった。そして、俺はプレシアさんの方を向き、声を掛けた。

「じゃあ、プレシアさんの治療に移る。というか今の段階では流石に色々無理がある。このままでは治療魔法に身体が耐えられないだろう。だ「そんな!!」ら」

途中で声を上げたフェイト嬢を手で制し、続ける。

「だから、身体を若返らせる。身体は26年前で良いかな?」

全員それを聞き、啞然としていた。プレシアさんが正気に戻り、声を掛けてきた。

「そんな事が出来るというの?……アルハザードなんて眼じゃないんじゃないかしら……」

プレシアさんが何か呟いているが気にしない。俺は一応、プレシアさんに、

「では、今から掛けます。準備は宜しいですか?」

と、声を掛ける。すると

「ええ、構わないわ」

と言うので、プレシアさんに魔法を掛けるべく、呪文を唱える。

「『合体魔法』起動。其は人の肉体の時を戻すモノなり、術式『リターン×オールド』肉体逆行魔法・リタルド』！！」

すると、プレシアさんが光り輝きはじめ、見えない位になった。そして光が止んだ時に、そこにいたのは俺より少し年上程度――（大体22、3）の女性……プレシア・テストロッサさんだった。

「あっ、戻しすぎた……。まあ、誤差の範囲か……。すみません、プレシアさん」

どこで加減を間違えたのか分からないがちよっと申し訳ないので謝っておく。それにしても……。すごく……。美人さんです。

「いえ、構わないわ。……。むしろ嬉しいくらいよ？」

プレシアさんがそう言ってくれたので胸を撫で下ろした。しかしこの人、すごく嬉しそうだ。まあ、女性は大体そんなものなのだろう。

「それなら良いんですが……」

そう受け答えして、アリシアの様子を見る。……。どうやら、診た感じ魂が肉体に馴染むのに少し時間が掛かっているようだ。

「後数時間と言っていたが魂が肉体に馴染むのに少し時間が掛かっている。もしかしたら……。明日までかかるかもしれない」

そう言うところシアさんは、

「それなら部屋を用意させるから、今日は泊まっていきなさいな」と言うので、俺はとりあえず泊まっていくなことにしたのだった。

第3話 治療と約束と和解と蘇生

改訂版（後書き）

さてさて、御都合主義な感じで突き進んでいく明君ですが、ついに後々に響く原作崩壊をさせてしまいました。この後はどうしてしまおうのでしょうか？

使用魔法技一覧

リザレクション……テイルズ系高レベルの回復術。かなり広域に渡って同時に回復出来る。しかも敵味方識別すらする。今回は一応念の為。

スプラッシュ……

高水圧を敵にぶつける魔法。最小単位の魔力で放てば眠気覚ましの洗顔も可能である。

インディグネーション＋メテオスウォーム……極大の雷を落とす、追加で隕石を落とす術式。

蘇生術式……神力以外では発動し得ない術式。女神アステスのクラスの御名を扱い、起こす奇跡。ただし、人数制限あり。

第4話 完遂と謝礼 改訂版（前書き）

初の感想・指摘。有難う御座いました。色々織り込んで頑張ろうと思います。

第4話 完遂と謝礼 改訂版

翌日。腕時計を確認した所午前5・00頃に目を覚ました俺は、アリシア嬢の様子を見に行った。部屋に入ると、プレシアさんがいたので挨拶をする。

「おはよう御座います、プレシアさん。アリシア嬢はまだ目覚めていないようですね？」

どうやら全く眠っていないようで少し隈が出来ている。まあ、当然だろうな。誰だって、もう会えないと思っていた愛しい愛娘が目覚めるのなら一番に会いたいだろうしな。

「おはよう。そうね……早く会いたいわ。ところで相川。貴方は結局何の為に私達を助けてくれたのかしら？こんな事、何の対価も無しにやるような事じゃないわ」

俺はポカンとした。確かにこんな事をして、ピースが手に入るわけではない。この人達がその気になれば管理局なりに連絡して、こんな事が出来る人間がいるといって取引に使う事すら出来るだろう……まあ、そんな事する様な人達では無いと思うけれど。だけど。

「……。いや、別に何某かの対価を求めていますせんし。只、こんな人達がいるのなら放つとけないなと思っただくらいですし。……強いて言うなら、自己満足でしょうかね？」

今度はプレシアさんが呆然とする番だった。そして呆れ返った様な眼で言った。

「貴方は……。自分が何をしたか分かって言っているの？魂を蘇生する術式なんて管理局、いえ、人が心から欲する様な物だし、他にも貴方が使った見たことが無い魔法式に、高位広域回復術式だって管理局からすれば咽喉から手が出るほど欲しい物の筈よ？序でに此処に来る為に用いたレアスキルだってそう。魔力・姿・熱源・音声を隠蔽したまま近づく機体鎧、だったわね。偵察にこれほど向いたモノも他に無いわ」

成る程。無償の人助けに使うには余りにもデメリットばかり目立つ、と。

「いや、別に管理局と戦う事になっても、俺としては『面倒な事になるだけ』なんで。叩き潰そうと思えば出来ない事は無いですし。……最も、やってもそれこそデメリットしかないんでやりませんが。管理局が無いと困った事になるのは管理世界の一般人たちですし。あくまで自己満足です。テストロッサ一家に対価として望む事なんて、何一つありません。まあ、俺も男ですから、そんな美人一家とお知り合いになれたのは嬉しいですけどね。そんなものですよ」

俺はそう言っているとプレシアさんの傍まで行ってリジェネを唱えた。

「これで少しずつですが体力が回復していくでしょう。ほら、隈も薄くなってきた」

そういつて俺は部屋を出て行こうと踵を返し、歩き出した。出て行く時、プレシアさんは何かを考え込んでいた様だったが。

S i d e o u t

プレシア side

相川が部屋を出て行った後、私は暫く考え込んでいた。あの人には、返し切れないほどの恩を受けたわね、何か恩を返せる方法はないかしら。目標さえ分かれば私達も手伝えるのだけれど。……後で聞いてみようかしら。私は今はアリスアの事が有って動けないから、事によってはフェイトに手伝う様に言ってみよう。もう少ししたら、朝食の準備ね。その間はフェイトに見ていて貰おうかしら。なら、フェイトを呼ばないといけないわね。なら、その時にでも言おうかしらね。

Side out

明 Side

俺はその後、城の中を色々動いていた。そして2時間程経った頃、念話が聴こえてきた。

『相川、聞こえているかしら。食事の用意が出来たから食堂まで来て貰えるかしら?』

『あ、分かりました。そしたら直ぐに行きますんで』

簡単なやりとりを終えて、直ぐに食堂へ向かう。因みに俺が並行世界の人間だということを、彼女達はまだ知らないが、もう伝えるつもりでいる。その時に目的も伝え、連絡先を教えるからお暇させて貰い、ジュエルシード探索に戻ろうと考えている。次元犯罪者になっってしまうだろう彼女達が一緒に来るのであれば良いかもしれないが、何時までも長居していると愛着がわいてしまい、再び旅に出る時に辛い思いをする事になりかねない。第一、前述の通りでも、一緒に連れ歩くとして次の世界か、安全な世界まで。それも基本的

にダイオラマ球に入れて行くから滅多に会うことも無い。恋愛関係を持てればずっと連れて行っても問題は無いが……。余り有り得ない妄想をしても仕方ない。

そんなこんな考えている内に食堂に着いたので、フェイト嬢とアルフに挨拶をする。

「おはよう。フェイト嬢、アルフ。昨日は良く眠れたかな？」

こっちを向いたフェイト嬢が、

「あ、おはよう御座います。相川さん。昨日は母さんを治して頂いて本当に有難う御座います」

とお礼を言うので、頭を自然と撫でて、

「構わないよ。アレくらいはね。それよりも沢山甘えて今までの時間を取り戻すんだぞ？」

と言って、今度はアルフに向き直る。

「おはよー、相川……。なんか他人行儀だねえ。……。明って呼んでも良いかい？」

と、とてもフレンドリーな感じなので、

「うん。それなら周囲の親しい奴は俺の事をアキと呼ぶからそう呼んでくれて構わないよ」

と、かえした。アルフはそれを聞いて、笑顔で分かったと返してく

れた。俺はフェイトに、

「プレシアさんは？ここにはいないみたいだけど、アリシア嬢の所かい？」

フェイト嬢は微笑みを浮かべて、

「そうだと思います。母さんってば心配性なのかな？実は昨日も私が姉さんが出来たと浮かれています。転んだ時に凄い心配をしてくれて、嬉しかったんです。でも骨折ってない？は無いと思うんですけど……」

……どうやらプレシアさんは、対自分の子供前提でポンコツ母になる様だ。新しい真実である。フェイト嬢は続けて言う。

「あ、そうだ。アキさんが此処にきたら朝食を出すように母さんに言われてたんだった。ちょっと待っていて下さいね。直ぐに持ってきますから！」

そういうとフェイト嬢は急いで奥に入ってしまった。

「急がなくていいぞ。あんまり急ぐと転んだりして危ないからな」

俺はそう声を掛けて食器等の準備が整っている席に着く。他の席には何も用意されていなかったの他の人達はもう食べた後のようだ。食堂に着くまでに少し時間がかかったからなあ。そんな事を考えているとフェイトがそのまま慌てて朝食を持ってきた。そして案の定転びかける。その時までに立ち上がってフェイト嬢の方に向かっていた俺は『レビテ』を朝食に掛けるのと同時に『瞬動』を使い、倒れるフェイトを後ろから支えた。

因みに後ろから支えたのは、前からだと抱き合うような形になる様な気がしたからだ。それは幾らなんでも気まずいだろう。フェイト嬢も困るだろうし。形的に尚悪い気もするが、気にするな、俺は気にしない。

閑話休題。

それにしてもこの娘も中々人の忠告を聞かないようだ。俺は手を離しながら苦笑交じりに一言注意をする。

「フェイト嬢。人の忠告を無視するのは頂けないな。そんな事では今後も困る事になりかねないぞ？……まあ、それはともかく。朝食を持って来てくれて有難う、フェイト嬢」

後半は注意するだけなのと思って、お礼を述べてみた。フェイト嬢は恥じ入りながらお礼を言うてくれた。娘を見る的な意味合いで可愛い。

その後、何事も無く食事を取り終わり、フェイト嬢・アルフを伴ってアリシア嬢の部屋に行く。するとドアの向こうからプレシアさんの泣く様な声が聞こえたので、部屋を静かに少しだけ開けてみた。そこでは目覚めたアリシア嬢を抱きしめて泣きながら喜ぶプレシアさんと、戸惑いつつも抱きしめられているアリシアの姿があった。俺達は部屋の扉をゆっくり閉め、その場を静かに離れて行くのだった。俺も再会の時に入って行ける程空気が読めない訳じゃない。その後中庭へ案内して貰い、そこで次元倉庫からシートを敷いて座り込み、フェイト嬢・アルフと雑談に興ずるのであった。

「アキさん、一つお聞きしたい事があるんですけど」

フェイトが急に真面目な顔をして聞いてきた。俺も真面目な顔に戻る。

「うん？何かな。出来得る限り答えよう」

そう言って質問を答える準備を整えた。

「はい。えっと、アキさんは昨日の夜雑談をしていた時に地球から来たといっていましたか、そこでは何をしていたんですか？」

「あ、アタシもそれは聞きたいねえ。何であんたみたいな凄い奴が魔法技術ゼロの世界にいたのか」

ふたりで同じ質問か。ふむ。確かに普通は気になるよな。俺みたいな魔導師が何故、そんな所にいるのか。なので目的を説明してやる事にした。

「俺は地球出身といったが、実際は違う地球『並行世界』からやってきた。次元世界とは訳が違うぞ。所謂I Fの世界という奴だ。例えばそうだな。実際にはアルフは使い魔だな？」

「そうだよ。フェイトの為に存在するんだ」

アルフは得意げに胸を張った。尻尾も揺れている。

「それが普通にペットとしてテスタロッサ家で生きている世界とか、そういう細かい違いがある世界、それを『系列並行世界』と俺は呼んでいるが。それとその大元の世界、名付けるなら『大元並行世界』（たいげんへいこうせかい）が存在するわけだが、この『系列並行世界』だと此処の並行世界がそれに当る。『大元並行世界』が無数

に浮いているのがまたまた俺名称『超越次元』と言うんだが、俺はその『超越次元』に存在する『大元並行世界』を回って、とある物を探しているんだ」

そこまで切ると、フェイト嬢を見た。考えながら必死に整理整頓しているようだ。俺はどうやら説明下手だったようだ。仕方が無いので探査機を弄り10m四方のウィンドウを出して樹を何本も書き出し、その内一本にズームする。そして枝の一本一本に『系列並行世界』と書いて、幹の部分に『大元並行世界』と書く。それを何度も繰り返し大森林を作った。そしてそれらの木々の間の空間を指して『超越次元』と書いた。

「要するにこれが『世界』の全ての有り様だ。分かり易いように『樹』という形で書かせて貰った。最も、『樹』の数はこんな物じゃないがな。と、話の本筋に戻すが理解できたか？」

フェイト嬢は何とか頷く。アルフは既に追いついて来れないようだ。頭から煙が上がっている。

「さて、俺はそんな『世界』をとある物を探して駆け巡る人生を送っている。で、その探している物だが、それは世界の欠片だ。俺が住んでいた、な。それが全部そろえば世界再生が出来るらしいから、それを探している。欠片は物に入り込む事も有るし、人の中に入っている事もある。気が遠くなるような話だ。で、それはこの世界じゃロストロギア・ジュエルシードと呼ばれる物の中に入り込んでいる。それで地球の中でうろちよろしているって訳だ」

それを聞いてフェイト嬢の顔色が悪くなった。アルフも気まずげだ。

「!ジュエルシード。……実はそれをばら撒く事になったのは私のミスです。……ゴメンなさい」

成る程。だったら分からなくも無い。海鳴に來たのが良い証拠だ。落ちた後、何処に落ちたのかが分からなくなったのなら探していて遅くなったと言う見方も出来るし。

「気にしないで構わないよ。おかげで直ぐに分かったんだからな。返って助かったかもしれない。……さて、と。そろそろ探索再開しないと不味いからな。プレシアさんに挨拶してから戻る事にするよ」

そう言って俺は立ち上がり、フェイト嬢とアルフも立ち上がったのでシートを仕舞う。そしてプレシアさんの気配を探る。……どうやらアリシア嬢と一緒に食堂にいるようだ。一応、リザレクションで衰えていた部分を治しておいたからか、動く事も可能なようだ。因みに俺のリザレクションは一般の人レベルまでなら筋肉等の成長を促せる。少し術式を改良した結果である。

閑話休題。

俺はフェイト嬢・アルフを伴ってプレシアさんのいる食堂へと向かった。食堂に行くとプレシアさんがアリシア嬢に簡単な食事を作って食べさせていた。俺は遮って悪いと思いつながら、

「プレシアさん、俺はそろそろ地球に戻ります。アリシア嬢の経過も大丈夫のようですし。何かあればこちらのアドレスに連絡をして頂くか、念話を下さい。できる限り、急いでお伺いします」

プレシアさんは俺のほうをむいて口を開いた。

「本当に世話になったわね。所で私たちに何か出来る事は無いかしら。こうも一方的にお世話になっておいて何も返せませんでは『大魔導師』プレシア・テストロッサの名が泣くわ」

俺は良いと言おうとしたが、そう言われては何もさせない訳には行かない。返って失礼になるからだ。

「ふむ。それでは地球に下りてジュエルシードの探索をお願いします。見つけたら封印して俺の所まで持って来て貰うか、呼んでください。暴走していた場合は呼んで下さい。プレシアさん本人なら兎も角、フェイト嬢やアルフを危険に晒す事は無いと思うので。それと現地には現地の魔導師が一人います。その子とかち合ったら協力してあげるか、引き上げて下さい。一応あったら自己紹介くらいはお願いします。礼儀正しい良い子なので。フェイト嬢やアリシア嬢の良い友人になれるかもしれませんし」

と言うか、それしかして貰える事が無い。俺の目的はあくまでもピース。だが、只の貸し借りでもう帰れない次元世界旅行に連れて行く訳には行かないし、ましてや超越次元に関わって貰う訳にも行かない。少々の事では納得してくれないだろうし。結局、その案件で手を打ってくれたテストロッサ家と共に地球に戻るのであった。因みにプレシアさんは海鳴近郊に有った中規模の新古物件を買って暮らす事にしたそうだ。因みに俺の部屋も用意してくれたらしいので、御厄介になる事は変わらないのであった。

第4話 完遂と謝礼 改訂版（後書き）

どうしてこうなったのだろう。（汗）

普通に別れて終わる筈だったのに。主人公とキャラが普通に自分の制御を離れていくのです。

……まだまだ若造ですよ。

取り敢えず、もう少し練らないとだめかなあ。（汗）

今回の魔法一覧

レベテーション……前回も会ったのに入れ忘れしました。すいません。
この魔法はゼロの使い魔の魔法で、基礎のコモン・マジック。物体を宙に浮かせる魔法です。

瞬動……足に氣や魔力を集中し、放出する勢いで瞬間的に移動する技術。熟練の域に達すると技の『入り』と『抜き』が全く判別出来ないものになる。別名縮地法とも言われる。他にも応用技として宙で氣や魔力を使い、移動する虚空瞬動というAランク技術もある。

それでは次回も宜しくお願いします。

第5話 閑話? テスタロッサ家の一日(前書き)

お読みになっていて下さる皆様まだいらっしやいましたら、お久しぶりで御座います。まだまだ執筆スピードが遅く、不定期更新になりやすい現状では御座いますが、頭の中が纏まり、何とか進められそうな感じになってきましたので再開させて頂きます。相変わらずの超・駄文では御座いますが頑張って続けさせて頂きたいと思えますので、どうか生暖かい目でご覧になって下さい。

第5話 閑話？ テスタロッサ家の一日

さて、本日はテスタロッサ家の一日を紹介しよう。

朝7…00。俺は目を覚ますと、俺の部屋にだけ別で置いてある洗面所にて着替えと身支度を済ませ、階下へと降りる。するともう既にプレシアさんは起きているようで、キッチンから良い匂いが立ち込めてくる。俺がリビングに入るとプレシアさんが、

「あら、おはよう明。起きたのね。なら悪いのだけれどフェイトとアリシアを起こして来てくれないかしら」

俺はそれに軽く頷き、二階のフェイトの部屋に行く。

「フェイト、起きろ。朝だぞ」

と扉の前で扉をコンコンたたきつつ声を掛ける。中から、

「ふぁーい」

と、フェイトの声が聞こえたので、次に隣のアリシアにも、

「アリシア、そろそろ起きろ」

と、声を掛ける。

「ふみゅ。……ふぁーい」

と言う可愛らしい声が聞こえ、思わず微笑ましい気分になった。

もう一度下に降りていき、テーブルについた。するとプレシアさんがバタートーストとサラダを持ってきたので適当にサラダにドレッシングを掛けて朝食の準備をする。

15分位するとフェイトとアリシアが降りてきたのでプレシアさんが、

「はい、アリシア、フェイト。貴女達の分よ」

と、朝食を持ってくる。

「おかーさん、ありがとう」

「ありがとう、母さん」

と言うと共に二人は朝食を受け取り、テーブルへ。因みにアリシア、フェイトの呼び名については、プレシアさんから、

「一緒に住んでいる以上家族の様なものなのだから、変に堅苦しい言葉なんて使わなくても良い」

と言われて、嬢付けを禁止されたので、普通に呼び捨てで呼んでいる。そう言われて初めて呼んだ時、アリシアに、

「わーい、妹だけじゃなくって、お兄ちゃんも出来た」

と言われて微笑ましい気分になったのは内緒である。

それはともかく
閑話休題。

朝食をとりながら雑談をしたりして過ごし、食器を各自自分で片付ける。おつちよこちよいな部分があるフェイトが案の定、足元を滑らせて食器ごと倒れそうになり、落ちる食器を俺が『レビテト』を使ってとめ、フェイト自身は後ろからプレシアが腕を掴んで転ばないようにする。なんて事があったりして。騒がしい一面が終了し、プレシアさんが食器を洗った後、俺達は『ダイオラマ球』へと入っていった。魔法の訓練をする為である。余程の攻撃であっても耐え切れるアステス仕様なので全力で力を振るえるのだ。色々と便利なので、俺にとっては無くてはならない物になり掛けていたりする。南国リゾート系の『ダイオラマ球』はバカンスに、電力は魔力仕様のトレーニング施設をまるまる放り込んだトレーニング系『ダイオラマ球』、極地仕様『ダイオラマ球』は修行にも使える。それ以外にも様々なタイプの『ダイオラマ球』があるが、これは別の時に示させて貰う事にしよう。

閑話休題。

俺達が入った『ダイオラマ球』は南国リゾート&修業も可能な南の無人島タイプ。ここにきた理由は至って簡単。プレシアにフェイトの訓練を頼まれたからだ。因みに時差は中の6時間が外の1時間。当然、設定変更は自由だ。

フェイトは『ダイオラマ球』に入ると同時にインテリジェンスデバイスのバルディッシュをセットアップし、バリアジャケットBJを展開した。俺は俺で機体鎧『ガンダム』を召喚する。当然予め非殺傷設定にしてある。フェイトはハーケンを、俺はビームサーベルを構える。そして次の瞬間、

『ソニックムーブ』

フェイトの姿が消え、俺の背後にその姿がハーケンを振りかぶった姿で現れる。そして、真横に一閃される。が、俺はそれを、振り向き様に縦に斬り上げることで受け止め、鏢ぜり合いになる。が、こちらは大人。そんな状態でもビームサーベルを片手で持って鏢ぜり合いをしながら、ビームライフルを左手で撃つ。フェイトは直ぐに持ち替えたビームライフルに気が付き、真横に跳ぶ。ちっ、避けられたか。こちらは直ぐに横にビームライフルを向け、連射するが、当たらない。俺は下がりつつもビームライフルを連射しながら機体鎧を着替える事にする。

「くっ、機体鎧『F91』展開!!」

直ぐにF91の装甲に姿が変わり、速度が増す。ヴェスバーを構え、フェイトに向けて放つ。フェイトがそれを紙一重で避けた所で、フェイトの目の前にビームサーベルの切っ先があった。

「さてフェイト。俺の勝ちだな。……さて、どうする? もう一戦するか?」

答えは分かりきっているが、フェイトに尋ねてみる。

「……もう一度お願いします」

……ほらね、やっぱり。

そのまま何回か戦い、今日の実戦訓練は終わったのであった。因みにその後、先に行って水着に着替えていたプレシアさんとアリシアさんに合流して海で遊びまくったのであるが、……プレシアさん21歳が水着を着てアリシアと遊んでいる姿は……大変眼福であったただ言っておく。

……そして現在時刻、午前10…00。テストロッサ家一同と俺は近くのデパートまで来ていた。日用品で足りないものを買ったりするのである。

「おかーさん、フェイト、早く早く」

「アリシア、そんなに急がないの。転んだりしたらどうするの」

プレシアさんやフェイト、アルフとのお出かけがうれしいのかはしやぎ回るアリシアと心配そうに、でもやはりアリシアと出掛ける事が叶って心底嬉しそうにしているプレシアさん。その隣をこれまたとても嬉しそうなフェイト、認識障害で隠してはいるもののしっぽを無茶苦茶振り回して嬉しそうな顔をしてその隣を歩いているアルフ。フェイトが幸せならそれだけで嬉しいのだろう。その4人の後ろを歩きながら俺は和んでいた。原作もこんな風なら良かったのに。……まあ、原作をどうこう言っても始まるまい。俺はただ、俺がこの世界にいる限り、この家族を害そうという輩、管理局もそうならそれらを含めた全てから護りたい、そう思い、それを実行するだけだ。

その後、デパートで服や日用雑貨等を購入し、次に家電量販店に行つてある程度家電を購入、そして散策がてらとある喫茶店で食事をする事に。

「さて、此処が俺お勧めの喫茶店にして、この世界でジュエルシード探索をしている魔導師の家族が営業している喫茶店『翠屋』だ。とは言っても敵対している訳でも味方している訳でもないから警戒なんかは要らない。スクライアはともかくなのは決して悪い子じゃないから、フェイトやアリシアの良い友達になれるかもしれない。まあ、今日は平日だし、なのは嬢も居ないだろうから気にし

なくても構わない。食べて帰ろうか」

俺はそう言うどアを開けて入っていった。後に続くテストロッサ家一同。そして、適当な物を注文して雑談をしながら食事をして、最後にシュークリームを幾つか購入して帰ったのであった。家に帰ったのが大体午後1時位だ。

帰った後、プレシアさんは眠いと言うアリシアの昼寝に付き合うといていたので、フェイトとアルフは修行用『ダイオラマ球』へ、俺はある事を思いつき、実験・検証する為リニスの靈魂を伴い、様々な分野の研究施設を放り込んだ研究用『ダイオラマ球』に入っていたのであった。

そして午後5…00。

現実で2時間程経つ頃に俺達は戻って来た。この研究用『ダイオラマ球』は時間設定を極限まで広げている。入れるのは俺と俺が許可をした人間だけだ。そのようにアステスが設定をしてくれた。何故ならこの『ダイオラマ球』は時間設定をよく変えるからだ。そうやって事故防止をしている。

閑話休題。

中に入っていた時間は20年。その間にリニスの肉体を造っていた。SRWのバルマー帝国の技術を応用して、魂を猫型から人型に変えてからリニスの使い魔の姿のクローンを造り出すのに20年かかったのだ。素材が魂しか無かったのが最大の要因だが、テロメアなどの問題点も解決が遅くなった一つの原因である。

「これでリニスは再びプレシアの使い魔が出来るな」

と、声を掛ける。

『はい。本当に有難う御座いました。この恩は絶対に忘れません』
「まだ肉体自体は完成していないんだ。そんな必要ないさ。失敗するかもしれない」

歓喜に溢れる声で礼を言うリニスに俺は冷静に返答する。実際どうなるかは解らないのだ。失敗すれば、二度と生き返れなくなる可能性だって捨て切れないのだ。

『貴方は失敗なんてしないと思います。……奇跡を起こしてくれた貴方なら。もし、失敗したって文句なんか言いません。だって、貴方は貴方が出来る最大の方法で、私の為に20年も使ってくれたんですから』

「俺は不老不死だし、この研究だってリニス以外にだって使うことが出来る。それに、こいつはある意味おまけだよ。自分にならうにか出来る事なのに何もしないで一人だけ仲間外れと言うのは、見ていてとても……んー……何て言うか……うん、とても後味が悪いんだよ」

俺は後味が悪いモノが死ぬほど嫌いだ。少なくとも自分で気が付いて、自分でどうにか出来る事・どうにかしてやれる事は極力、どうにかするべきだと考えている。

『それでも、貴方は私を助けてくれる新しい希望をくれました』

リニスは俺の前に立ち手を自分の胸に当てながら続ける。

『だから私は貴方に感謝しますし、貴方を信じます。それで万が一

失敗しても、私が貴方に感謝を忘れる事、これだけは絶対に有りません』

「……………良い娘だなあ。出来る事なら嫁に欲しい位だけど。…………いやいや、無理だろ。どう考えたって。」

「…………ありがとう。必ず成功させて見せるさ。だから、期待していてくれ」

こんなに期待してくれているんだ。これで失敗なんてしたら嘘だぜ。リニスとそんな話をしながらリビングに来ると、プレシアさんがアリシアと二人でキッチンに入っていくのが見えたので声を掛けた。

「プレシアさん、アリシア。今から食事の準備ですか？」

リニスは再びプレシアの近くにいた。やはり気になるらしい。元はプレシアの使い魔だし当然だろう。

「ええ、そうよ。アリシアが手伝いをしてくれると言うから。ね、アリシア」

「うん！おてつだいがんばるの！」

しつこいようだが本当に嬉しそうなプレシアさんと両手を胸の所で立てて可愛くガッツポーズをしながら頷くアリシア。

「……………待って！私もお手伝いしても良いかな？」

と、そこにフェイトが走ってきた。その言葉に微笑んで頷くプレシアさんと目を輝かせるアリシア。…………良い風景だなあ。親子三人

でキッチンに入っていく。アルフはアルフでソファで座って三人を見てうんうんと頷いている。……どうやらプレシアがフェイトを蔑ろにしないか気にしていたらしい。まあ、解らんでもないが。そんな心配は要るまいと思えるな、あの三人を見ていれば。と、考えているとアルフがこっちを見て何やら考えている。そして声を掛けてきた。

「ちょっと良いかい。散歩といこうじゃないか」

俺は頷いてプレシアに声をかける。

「ふむ、分かった。……プレシア、少しばかりアルフと散歩に行ってくる。そんなに時間を掛けるつもりはないが……」

「ええ、わかったわ。気をつけて行ってらっしゃい」

そういうプレシアを背に、俺達は家を出て近くの公園に向かう。そのまま公園にたどり着き、ベンチに座るとアルフに眼をむけた。するとアルフが話しはじめた。

「アキ、あんたに聞きたい事が一つある。……あんたは何がしたいんだい？ あたしにはよく解らないんだよ。あたしはあんたを信じて良いのかい？」

「どうやらこいつもプレシアと同じで俺がどうしてこんな事をするのか解らないらしい。」

「ああ、アルフは俺を信じてくれて全く問題無い。俺がお前達を裏切る事はお前達が裏切らない限り絶対に無い」

俺とアルフは暫く眼を合わせつづける。……やがてアルフは、溜

息を付いて話し掛けてきた。

「はあー、あたしの負けさ。あんたの眼も心も嘘を一切付いていない。悪かったね、疑ったりしてさ」

……どうやら信じてくれたようだ。俺達は軽く笑い合うと、家に戻る事にした。大体30分位見つめ合っていたみたいで帰ると午後6…00位だった。その後親子三人が協力して作り上げた料理に舌鼓を打ちつつ雑談を重ねながら食事を済ませる。

その後、自分の部屋のシャワールームでシャワーを浴びようとした時にフェイトから訓練のお誘いが有ったのでトレーニング系の『ダイオラマ球』で、主にルームランナーやエアロビクス等の体力向上訓練に付き合っただけたりして、大体午後11…00頃に訓練を切り上げる。そして浴室に行くフェイトと別れて自室でシャワーを浴びてから0…00にベッドに入り、眠りについたのであった。

第5話 閑話？ テスタロッサ家の一日（後書き）

作者…さて、今回はテスタロッサ家の一日をお送り致しました。何気に結構日常の方が難しいものですね。

明…そりゃ難しいだろうよ。実際ファンタジー展開のほうが頭の中で渦巻いている作者に日常なんてそうそう書ける訳無いからな。

作者…いや、まあそうなんだがな？ 閑話って言うのは大事だって指摘も頂いたからな。この際、苦手な分野もやってみないと拙いだろう？ こういうのはやらないと文章レベルも上がらない訳で。

明……確かにその通りだろうけれどそれをこういう場で見せても良いのか？

作者…こういうのは人様から指摘を受けて伸ばすんだよ。じゃないとこんなものだろうって考えでレベルを伸ばす所か堕ちて行ってしまうじゃないか。

明……まあ、考えがあってやっているんなら良いんだ。それともう一つ、出来るだけ不定期は止めて頑張れよ。

作者…ぐはっ

さて、いつも通り『今回初めて出てきた魔法・技・能力解説』コーナーです。

・魔法

『ソニックムーブ』……

ご存知リリカルの高速移動魔法の一つ。使い手であるフェイトは主に背後への移動から斬撃という手段をとっている。

以上ですね。……一つしかない上に、リリカル魔法……。

・能力（スペックのみですが）

『ガンダム』

型式番号

RX-78-2

頭頂高

18.0m

本体重量

43.4t

全備重量

60.0t

出力

1,380kw

推力

55,000kg

センサー有効半径

5,700m

装甲材質

ルナ・チタニウム合金

武装

60mmバルカン砲（内蔵：弾数50）×2

ビーム・ライフル

（オプションでスーパー・ナパームを装備）

ハイパー・バズーカ

ビーム・サーベル／ビーム・ジャベリン×2

シールド

ガンダム・ハンマー

ハイパー・ハンマー

主な搭乗者

アムロ・レイ

『F91』

型式番号

F91（F-91）

頭頂高

15.2m

本体重量

7.8t

全備重量

19.9t

出力

4,250 kW

推力

88,400 kg

推進機関

アポジモーター×51 (8)

装甲材質

ガンダリウム合金セラミック複合材

武装

バルカン砲×2

メガマシンキャノン×2

ヴェスバー×2

ビームシールド×1 (1)

予備ビームシールド×1 (1)

ビームサーベル×2

ビームライフル

ビームランチャー

主な搭乗者

シーブック・アノー

以上の通りです。武装が余りにも活かせていない……。速度だけしか活かせないとか……。ORZ

さて、次回はなのは組との交渉です。上手く行くかどうかは次回をお楽しみに……

第6話 交渉準備と『法』と決意と（前書き）

どうにか完成させることが出来ましたので投稿します。今後もしも定期更新になるんだろうなあ、とか考えつつも、どうぞ生暖かい視線で寛大な精神、心をお持ちの方のみ読んでやってください。

第6話 交渉準備と『法』と決意と

さて、今日はチーム高町との交渉の日である。交渉に出向くのは俺だけ。テストロッサ家の一同には今日も休んでもらうつもりだ。じゃないとジュエルシード探しをする時に管理外世界での魔法の使用許可問題なんか引っかけかかない。

地球に来るのがリンディ・ハラOWNやクロノ・ハラOWNだけとは限らないし、そもそも彼等が来るかどうか未定だから、下手に横柄な奴や最低な性格の奴が来れば使用許可について改竄をされたりして脅迫をされかねない。プレシアさん曰く、特に問題は無いとの事だが一応念の為。結局今しなくても後で使えば一緒ではあるのだが、そこは『俺だけが事前に探査をしていて、ジュエルシードが有る辺りにしてもらい、発動時に戦力として手伝って貰う』という方法をとろうと思っている。それならば緊急時という事でごり押しできるからだ。まあ、あまりふざけた事を言う様なら戦艦ごと因果地平の彼方へ消し飛んでもらうが。

閑話休題。

俺は午前中、フェイトに『ダイオラ魔法球』で実戦戦闘訓練を施してから昼食をとり、午後1時頃にフェイトがトレーニング用『ダイオラ魔法球』に体力向上訓練をする為に入るのを見届けると、ひと足お先におねむモードのアリシアと、お昼寝の準備をしていたプレシアに、一言断って出掛ける事にした。

「では高町家の喫茶店に行ってきます。あ、お土産でシュークリームをまた買って来ますので、お楽しみに」

「ええ、楽しみに待っているわ。気をつけて行ってらっしゃい」

プレシアさんと夫婦の様なやり取りをして出掛ける俺。……良いなあ。でもまあ、無いだろうな。

俺は近くにジュエルシードの反応が無いかをチェックする。一応、こちらから頼む形になるのだし、土産はあった方がいいだろうし。

因みに今まで手に入れたナンバーは覚える必要がないのでさっさと忘れた。どうせ封印魔法も知覚した物の中から思考で対象を選ぶものだから番号を覚える必要がない。決して面倒臭いと思った訳では無いことを追記しておく。

閑話休題。

俺がレーダーを起動させると丁度公園内に反応が有ったので、起動する前にさっさと封印すべく移動する。公園に辿り着いてから簡易魔力隠蔽結界を張り巡らせて、レーダーをデバイスモードに設定して起動、その後直ぐにジュエルシードを封印魔法で封印してピースを取り出し、格納部に収納する。そしてデバイスをレーダーに戻し、結界を解除する。

土産はこれで良いだろう。後は翠屋を目指して出発するだけだ。そう思いながら公園を出ると、向うからなのは嬢とスクライアがやってきた。距離的には200m位。どうやら正確な時間を決めて置かなかった事から、少しでもジュエルシードの探索に時間を当てようとしたという事だろう。向こうがまだ気が付いていない様なので俺は『瞬動』で5m前位まで移動して近づいて、彼女たちに話し掛ける事にした。

「おや、なのは嬢にスクライアじゃないか。今から其方に先日の交渉の件で伺おうと思っていた所なんだが、時間の方は良いかい？」

二人は突然目の前に現れた俺に驚いているようだ。それはそうだろう。人間の気配探知なんて常に広げている訳でもなし、目の前にいきなり現れれば普通の人なら驚く。

「うにゃっっ！！！！……あ、相川さん！！……うう、吃驚したあ……」

なのは嬢はあまりの事に驚き過ぎているようで、その眼は思いつきり涙目であった。少し罪悪感があるので、

「すまない。そこまで驚くとは思っていなかった」

と、謝る。

「いえ、大丈夫です。……それはともかくとして。こんにちは、相川さん。先日の件ですよ。翠屋まで御案内します」

なのは嬢が俺を先導してくれるようなのでお言葉に甘える事にする。スクライア？いつも通りなのは嬢の肩の上だ。……スクライア自身、なのは嬢に惹かれているであろう事は一目瞭然だが、早いところ人間であることを伝えないと例え人になったって男性として見て貰えないし、下手すればペットの延長としてしか見られんぞ。……まあ、こいつがどんな道を歩こうがしらんがな。

「で、魔法関連だが。悪いが親御さんの意向も聞かねばならんからすべて話すが、良いな？」

「なっ！！」

「スクライア、君が言いたいことも分かるが、理解してくれ。……」

君達の世界に『法』という名の理ことわりが有るように、この世界にも、いや、すべてには理ことわりと言うものが有る。成る程、君達の世界では年齢が幼かろうと魔法と知識さえ持っていれば、危険な仕事や責任有る仕事にも就けるのかも知れない。そういう『法』があるのだろうか」

スクライアは頷き、だからこそなのはにも魔力があるから手伝いくらいならという。だが俺はそれを一刀両断した。

「だがしかし、それはあくまでそちらの世界の『法』であり、理ことわりだ。こちらの世界の、この国の『法』という理ことわりでは、成人と認められるのは20歳。仕事が出来る様になるのだって5年後だ。なのは嬢が親に許可を取らずにそういう危険な仕事をするにはそれこそ約10年早い。しかし親が許可をすれば良いだけと言う訳でも無い。記憶が正しければ何らかの法律で仕事には最低労働可能年齢なるものである。子供が従事出来る仕事についての『法』は以下の様になっている。

本文としては、

1、使用者は、児童が満15歳に達した日以後の最初の3月31日が終了するまで、これを使用してはならない。

2、前項の規定にかかわらず、事業に係る職業で、児童の健康及び福祉に有害でなく、かつ、その労働が軽易なものについては、行政官庁の許可を受けて、満13歳以上の児童をその者の修学時間外に使用することができる。映画の製作又は演劇の事業については、満13歳に満たない児童についても、同様とする。

そして、今言った事を簡単に解説すると、こうなる。……原則として、使用者は満15歳に達した日以後の最初の3月31日、つまり、年度末が終了するまでの児童を使用してはいけないという事だ。まあ、例外というのも有るが、それにしたって、以下の要件をすべて満たしていないと、満13歳以上の児童を『修学時間外』に使用することは出来ない。農林水産業、非工業的事業や、児童の健康及

び福祉に有害でなく、労働が軽易なもの。そして、所轄労働基準監督署の許可を受ける事。映画の製作又は演劇の事業については満13歳に満たない児童についても同様。まあ、三つめは必要ないかな」

「……………かなり色々目を瞑っているが、実際はもう『OUT』過ぎて『チェンジ』である。」

「まあ仮に『法』を無視するにしても、暴走体退治を8割近い確率で伴う仕事なんぞ親の許可無しにするものじゃない。そもそもスクライア。お前は、もしなのは嬢が死んだり怪我をしたら責任を負う事は出来るか？」

「それは……………まだ、今の僕には出来ないと思います」

スクライアの顔色が悪くなる。一気に顔色が、と言う訳じゃ無い事を考えると、少しでも考えていた事らしい。そこでなのはが何か言いたそうにしているので視線を振る。

「ユーノ君は悪くないです！私がやりたいって言ったんです！！」

「なのは嬢。君の言いたい事は分かるが、君がこう言ったというのは、この場に限っては関係ないんだよ。あくまで『法』の問題だからね。君は君自身の責任を取れない筈だ。君が死んだ時、魔法が誤って一般人に当たってしまった時、そのほか諸々。その責任はこの世界じゃ何も知らない御両親に行く。たまった物じゃない。前者に至っては御両親や家族が知らない所で死ぬのだからその悲しみや怒りもまた絶大なものになるだろうね」

そこでなのは嬢の顔が酷く強張った。原作での彼女の考え方からして、『死』ぬ事で『迷惑』になるという変な考えでも持っているんだろうか、この娘は。言葉を続けた。

「だから、どうしても魔導師をやりたいのならキッチリと説明会でも開いて説得をしなさい。その上で約束事を作り、出来れば親兄弟に極力心配を掛けない様にする為に同行して貰うか、それが無理でも秘密裏に出掛けるなんてのは止めなさい。もう逢えないが、俺にだって家族がいた。その中でも妹が向こう見ずな娘でね。何度無茶をして心配を掛けさせられたか解らないくらいなんだ。だから、ご家族が心配をするだろう事は良く分かる」

二人ともいい子達だからこれで理解してくれると良いんだけど。暫く立ち止まって悩むなのは嬢とスクライア。そうして10分経った頃。

「……解りました。絶対に説得して見せます!!」

なのは嬢は顔を上げ、俺に向かって宣言してくれた。そして翠屋までいろいろ雑談をしながら向かうのだった。

第6話 交渉準備と『法』と決意と（後書き）

今回も少し説教成分が……。ORZ
更に今回は説明成分まで……。ORZ

今回は真新しい技は出ていませんので特にありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6725p/>

超越次元の旅人【旧題・異世界を旅する者】

2011年7月22日10時52分発行